

# 交換留学プログラムに参加する日本人学生の 留学目的と成果に関する研究

田 邊 信 (国際教育・協力センター)

## 要 旨

1980年にアメリカ・テキサス州の南メソジスト大学 (SMU) に10名の学生を派遣して以来、関西学院大学 (以下関学) は多くの学生を海外の協定校に送り出しており、現在では年間170名近くの関学生が1学期ないしは2学期間にわたって協定校 (学生交換協定校は約140校) での留学生活を送っている。だが、なぜ関学生が交換留学を志望するのか、また海外でどのような成果をあげているのか、現地でどのような課題に直面しているのか必ずしも十分に把握できていない。

こうした問題意識から、2016年-2017年にかけて交換留學生を送った関学生を対象にオンラインフォームによるアンケート調査 (回答者数50名)、及び対面式のインタビュー調査 (回答者数10名) を行い、留学の目的と現地での留學生生活の実態、そして留学の成果について分析した。その結果、多くの関学生にとって交換留学は自らの世界観を広げるとともに、自立心と社交性を高め、自信を獲得する契機となっていることが明らかとなった。概して、交換留学は学生に大きな成果をもたらしていると考えられる。

## 1. はじめに

1980年にアメリカ・テキサス州の南メソジスト大学 (SMU) に10名の学生を派遣して以来、関西学院大学 (以下、関学) は海外協定校の拡大と派遣学生数の増加に努め、今年年間1000名近くの学生を協定校に送り出している。派遣学生数では、関西外国語大学、早稲田大学、立命館大学に次いで全国の大学で第4位の規模を誇る [独立行政法人 日本学生支援機構, 2017]。そのうち、年間約170名の学生が1学期、ないしは2学期間にわたって正規の交換留學生として協定校 (学生交換協定校は約140校) での留學生生活を送っており、関学としても数年内に年間200名を越える学生を交換留學生として派遣することが目指されている。だが、そもそも、どういうきっかけで関学生 (そのほとんどが日本人学生) は交換留学を志望するのか、何を目的に渡航するのか、また海外の協定校でどのような留學生生活を送り、どのような成果をあげているのか (あるいは、現地でどのような課題に直面しているのか) という点については必ずしも十分に把握できていない。現状としては、国際教育・協力センターが学生に課している定例報告や事後アンケート、交換留学説明会での口頭発表などにおいて留學生経験者の個人体験が簡潔に語られる程度で、留學動機や留學実態について体系的に分析されているわけではない。日本国内をみても、日本人交換

留学生の留学動機や成果について体系的にまとめられた論文は極めて少ない。

こうした背景から、本研究では2016年秋学期から2017年春学期にかけて1学期ないしは2学期間の交換留学プログラムに参加した関学生（約100名）を対象にオンラインフォームによるアンケート調査、ならびに対面式のインタビュー調査を行い、交換留学の目的と現地での留学生活の実態、そして留学の成果について考察した。調査の結果、①交換留学経験者の多くがプログラム応募前までに修学旅行や短期語学研修等の海外経験を有していたこと、②専攻分野の理解よりも語学習得や海外生活体験、異文化理解、新たな人との出会いなど、国際交流を主たる目的として留学していること、③大学の所在地や語学要件をもとに留学先を選定していること、④交換留学によって関学生は自らの世界観を広げるとともに、自立心と社交性を高め、自信を獲得していることが明らかとなった。

以下では、まず日本人交換留学生の留学目的と成果について扱った先行研究を紹介し、日本人学生にとっての交換留学の目的と成果についての論考を整理する。その上で、アンケート調査及びインタビュー調査から浮き彫りになった本学の日本人交換留学生の留学目的と成果について明らかにし、派遣元大学としての本学の課題を指摘したい。本稿が関学だけでなく日本の大学生の留学促進に向けた示唆を提示することができれば幸いである。

## 2. 先行研究レビュー：交換留学の目的と成果

大学の世界展開力強化事業やスーパーグローバル大学創成支援事業など、日本人学生派遣にむけた動きは近年活発になっているものの、交換留学プログラム参加学生の動機や目的、成果について考察した先行研究は思いのほか少ない。これは依然として多くの大学において交換留学に参加する学生が極めて少数であること、また交換留学先が多種多様であるため行先が比較的定まっている短期あるいは中期の留学プログラムに比べて目的や成果について一般化しにくいことが原因だと考えられる。そこで以下では、交換留学を含んだ学部レベルでの留学に関する先行研究をもとに、留学の目的と成果についての論点をまず整理したい。

留学プログラムに参加を希望する大学生の動機づけに関しては、河合（2011）や池田（2011）が、国内での外国人学生との交流あるいは接点の有無が関係しているとしており、杉野・武・正楽（2017）も留学志向が高い学生は留学志向が低い学生に比べて国際交流活動における経験や国際交流スペースの利用頻度が高いこと、また外国語開講科目を積極的に履修している傾向があると指摘している。また、小樽商科大学と広島大学の学生を対象に留学動機について質問票による分析を行った船津・堀田（2004）は、短期を含めた過去の留学経験の有無が大学在学中に留学を希望するかどうかに影響するとし、過去に留学経験がある学生は経験がない学生に比べて留学を希望する確率が20%程度高いと推定している。この点については、岩城（2012）も、短期留学が交換留学参加への心理的なハードルを下げ、長期留学に向けての動機づけを高めることにつながっていることを明らかにしている。総括すると、外国人留学生を含んだ身近な留学経験者の存在、あるいは（短期も含めた）海外経験の有無が交換留学プログラム参加学生の動機づけに関わっていることが指摘されている。

一方、留学目的に関しては、在豪の日本人を対象に調査を行った小柳（2012）が、専門的な学問のために留学している学生は極めて少数で、キャリア・アップのために留学している学生が全

体の3分の1程度であることを指摘している。小柳によると、積極的な目的があって留学するというよりは、「どっちでも良かったがせっかくだから」、「一生に一度は海外で生活したかった」という消極的な目的で留学を決めた学生が相当数存在するという。また、京都大学の学生を対象に調査を行った河合（2009；2011）は、留学目的における文系学部生と理系学部生における違いを指摘している。河合によると、理系学生は「専門分野の勉強・研究」を念頭に大学院レベルでの留学を希望する傾向があるのに対して、文系学部生は「語学力向上」を理由に学部レベルでの留学を希望する傾向があるという。同様に池田（2011）も交換留学生として留学を希望する場合、留年をせずに海外経験ができるかどうかを意識されており、特定の専攻分野を学ぶことはあまり意識されていないと述べている。このように学部生（特に文系学部生）に関して言えば、専門分野を学びたいというよりは外国語習得や海外経験を得る目的で交換留学の長期留学プログラムに参加しているようである。

留学の成果に関しては、源島（2009）が交換留学プログラムに参加した学生は留学プログラムに参加していない学生と比べて「社会人基礎力」（経済産業省）が顕著に伸びていることを明らかにしている。また、野水・新田（2014）は、3ヶ月～1年間の留学プログラム参加学生（短期派遣）と3ヶ月未満の留学プログラム参加学生（ショートビジット）を比較分析し、前者は後者に比べ学業関連（専門分野の知識・資料収集、海外学問の水準や方法の理解、専門用語の習得）や語学関連（語学力の向上、外国語での研究発表や議論の仕方の向上）、進学・就職関連（進路や就職についての意識の向上、将来の方向性をつかむきっかけ、就活における強みの獲得）、その他（困難を自力で乗り越える力量の向上、視野の拡大、海外人間関係・人脈の構築）において自己評価が高いと論じている。総じて、交換留学により、前に踏み出す力や考え抜く力、異文化理解・活用力の向上による人間的成長といった教育効果が期待できるとされている。

このように先行研究では、特に動機や効果についていくつか興味深い論考がなされている。ただ、その多くが国立大学を対象としていた内容であり、留学の動機や生活実態、成果について部分的に考察するにとどまっている。したがって、交換留学についての議論を深めていくには、私立大学の日本人学生にとっての交換留学の意義についても包括的に考察していくことが必要だと思われる。以下では、そうした問題意識を念頭に関学生にとっての交換留学の意義について考案する。

### 3. 調査方法

本研究では、アンケート調査ならびにインタビュー調査による分析を試みた。個人の留学体験を分析する以上、調査対象者の主観性を拭うことは難しい。だが、アンケート調査とインタビュー調査を併用することにより、交換留学プログラムの参加学生の留学目的や成果に関する全体的な傾向とその具体的内容について明らかにできるのではないかと考える。以下、アンケート結果を通じて全体像を把握したうえで、詳細な留学動機や成果についてインタビュー内容をもとに考案する。

### 3.1 アンケート調査

#### 3.1.1 調査対象者及び実施手続き

2016年秋学期～2017年度春学期にかけて1年間関学協定校に交換留学生として留学した学生90名、ならびに2017年度春学期に1学期間関学協定校に交換留学生として留学した学生15名に対して、2017年6月にオンライン・アンケート・フォーム (Jotform Pro) を活用したアンケート調査を行った。無記名での回答を可としたが、インタビューに応じてもらえる学生を募るために氏名及びEmailを記載する欄 (任意記入欄) を設けた。実施にあたっては「お答えいただいたことは、統計的に処理され、個人情報外部に公表されたり、他人に漏れることは一切ありません。」と教示して倫理的な配慮を行った。

合計51の回答があり、分析では重複回答を除いた50回答 (男性12名、女性38名) を対象とした。渡航先は人数の多い順に、米国 (16名)、韓国 (6名)、カナダ (4名)、オーストラリア (3名)、ノルウェー (3名)、オランダ (2名)、ドイツ (2名)、フィンランド (2名)、フランス (2名)、台湾 (2名)、中国 (2名)、その他 (5名)、無回答 (1名) であった。また、所属学部は、国際学部 (34名)、総合政策学部 (4名)、文学部 (3名)、経済学部 (2名)、商学部 (2名)、法学部 (2名)、その他 (2名)、無回答 (1名) であった。

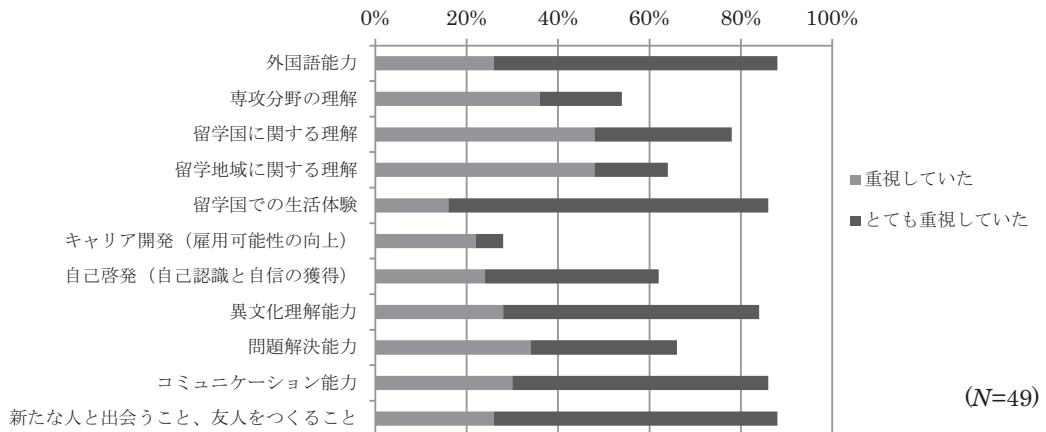
#### 3.1.2 使用した項目

アンケートでは、回答者の属性や留学前ならびに留学終了時の語学力、現地理解度に続き、留学目的と留学目的達成度、プログラム (「外国語科目」や「現地の社会と文化に関する科目」等の学術プログラムと「居宅生活 (ホームステイ・寮生活)」等の非学術プログラム) の有用性、現地学生/現地人との交流度、留学全体の満足度などの項目について多肢選択問題 (主として4件法) の回答と自由記述欄への記入を求めた。本稿では、紙面の制約から留学目的と達成度、および全体の満足度に絞った形で報告する。

#### 3.1.3 結果

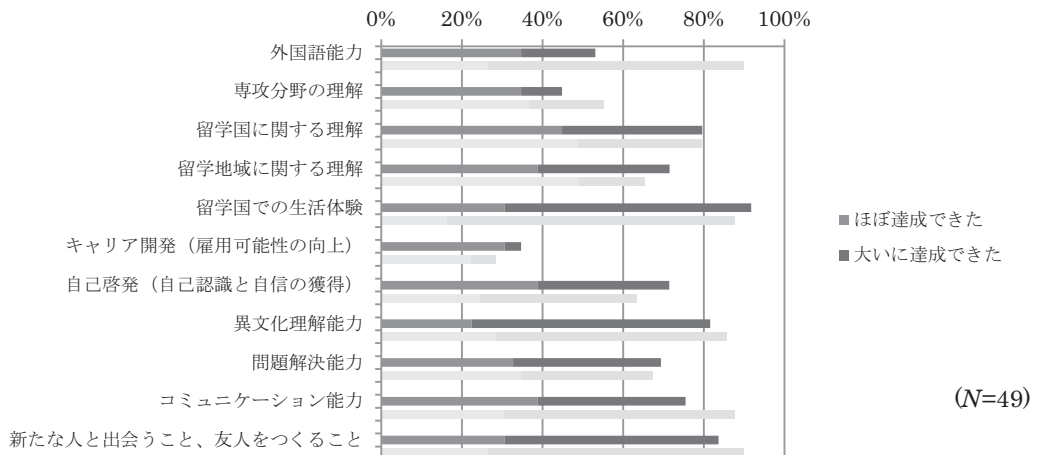
**留学目的** グラフ1は、留学目的にあたる11項目に関して、「重視していた」、「とても重視していた」と回答した者の割合を表したものである。全体の8割を超える学生が「外国語能力」や「留学国での生活体験」、「異文化理解能力」、「コミュニケーション能力」、「新たな人と会うこと、友人をつくること」を重視していた。逆に、「専攻分野の理解」や「キャリア開発 (雇用可能性の向上)」については全体の半数以下にとどまっており、留学目的としては他の項目に比べてあまり重視されていなかった。つまり、本学の学生に関して言えば、学術上あるいはキャリア開発上の目的を達成するためというよりは、海外での生活体験を中心とした異文化理解を目的として交換留学に参加している学生が多いと言える。これは前述の河合の議論を裏づける結果である。本学の場合、回答者の多くが入学後すぐに留学準備・申請に取りかかり2年生～3年生にかけて留学しているため、留学開始時点で学生自身の専攻が定まっていないことも一因と考えられる。(後述するインタビュー結果でも、学術プログラムの内容よりも所在地や外国語要件で留学先を選んでいくことが明らかとなっている。)

グラフ1 交換留学プログラム参加者の留学目的



**留学目的の達成** こうした交換留学プログラム参加者は、初期の留学目的をどれほど達成できたと感じているのだろうか。グラフ2は、上記留学目的の11項目に関して、「ほぼ達成できた」、「大いに達成できた」と回答した者の割合を表したものである。比較のために、グラフ1の内容を薄色で示している。これによると「留学国での生活体験」、「異文化理解能力」、「新たな人と出会うこと、友人をつくる」ことに関しては、回答者の8割以上が達成できたと考えており、「留学国に関する理解」や「コミュニケーション能力」に関しても7割を超える回答者が「ほぼ達成できた」ないしは「大いに達成できた」と回答している。一方で、「外国語能力」に関しては回答者の5割程度しか達成できたと感じておらず、外国語習得が思ったように進まなかったことを示唆している。学生のコメントの中にも「異文化理解などについては満足しているが、英語でのディスカッションや講義についてはついていけなかったところもあるのでまだまだ勉強する必要があると感じた」、あるいは「言語としての英語力を上げる授業がほとんどなかった」といった回答

グラフ2 交換留学プログラム参加者の留学目的の達成度



が複数見受けられた。また、「専攻分野の理解」や「キャリア開発（雇用可能性の向上）」についても、他の項目と比べてあまり達成できていないと感じている学生が多いようであった。

**留学の満足度** 次に、留学の満足度について尋ねたところ「留学先での留學生活に満足している」という記述文に対して、9割以上の学生が「そう思う」あるいは「とてもそう思う」と回答している。また、「私は留学先の大学を他の関學学生にも勧めたい」という記述文に対しても8割近くの学生が「そう思う」ないしは「とてもそう思う」と回答している。概して、交換留学の満足度は高いといえることができるだろう。なお、学生の満足度と留学先のプログラムの有用性との相関関係をみたところ、「留学先の社会や文化に関する科目」と「上記以外の留学先大学の科目」、「クラブ・サークル活動」、「ボランティアやインターンシップの機会」という点において中程度の相関関係が認められた(表1)。また、「居宅生活(ホームステイ)」に関しても弱い相関関係が認められた。授業だけでなく課外活動に参加できているかが、留学の満足度と関係しているようである。

以上まとめると、関学から海外協定校に交換留学生として派遣された学生の多くは専門分野の理解ではなく、外国語習得や留学国での生活体験、異文化理解を主な目的として留学しており、多くの学生が外国語習得を除いて初期の目的を達成できていると言える。また、全体の9割を超える学生が交換留學生活に満足しており、留学先での授業だけでなく、居宅生活(ホームステイや寮生活)、クラブ・サークル活動、ボランティア活動等に関わっているほど満足度が高い傾向にあるといえる。

### 3.2 インタビュー調査

#### 3.2.1 調査対象者及び実施手続

上記のアンケート調査の回答者のうち、関學学生10名を対象に2017年6月～10月にかけて、フォローアップのインタビュー調査を行った。インタビュー候補者の選定にあたっては、上記アン

表1 留学先プログラムと留学の満足度の相関関係

	私は留学先の大学での留學生活に満足している
外国語科目	0.261
留学先の社会や文化に関する科目	0.408**
上記以外の留学先大学の科目	0.400**
居宅生活(ホームステイ、寮生活等)	0.320*
クラブ・サークル活動	0.510**
ボランティアやインターンシップの機会	0.442*
国際交流イベント(国際センター主催のイベント等)	0.247
ランゲージ・テーブルやランゲージ・パートナー	0.070

\*\* . 相関係数は1%水準で有意(両側)

\* . 相関係数は5%水準で有意(両側)

ケートの最後に「インタビューに応じて構わない」という項目を設け、その項目にチェックを入れた学生にコンタクトを取った。ここでは、留学先が偏らないように心がけ、2年次に留学した学生だけでなく、3年次に留学した学生も含めるようにした。また、学部に関しても国際学部だけでなく、総合政策学部や商学部、社会学部、文学部などの学生も対象とした。異なる学部出身者を対象としたのは、交換留学申請や単位認定等における学部間の差異を明らかにするためである。なお、回答者10名のうち7名が2-3年次にかけて、3名が3-4年次にかけて留学しており、留学先は北米（米国、カナダ）5名、アジア（シンガポール、韓国、台湾）4名、欧州（ヨーロッパ）1名であった。

インタビューは半構造深層面接法を用いた。ここでは、事前に質問項目を用意しつつも、より留学実態を明らかにするため、回答者の発話内容に応じて質問の内容や量を適宜変更した。主な質問項目としては、交換留学の動機に関する事柄、交換留学先の選び方、交換留学先での授業や生活に関する事柄、交換留学を振り返って感じたこと、関学の交換留学支援体制に関する事柄であった。インタビューはすべて対面で行われ、内容はすべて録音された。なお、インタビュー開始時には、本研究の背景と目的、個人情報保護等について書面及び口頭で説明し、収集されたデータは本研究以外に使用しないこと、研究発表においては学生の個人名が特定されないよう配慮することを伝えた。

### 3.2.2 結果と考察

**交換留学プログラム参加の動機** 今回インタビューに応じた回答者の10人のうち9名は、交換留学プログラム申請前に何らかの短期ないしは長期の海外経験を有しており、多くの場合、その経験が交換留学プログラム参加の主たる動機となっていた。例えば、小さい頃にアメリカに住んでいた経験を有する学生は、現地で幼年期を過ごしたことで英語が得意になり、高校でも海外姉妹校交流を通じて外国人と交流する機会があったため、関学を受験する時には、在学中に留学することを決めていたと語っている。また、カナダに留学した別の学生は小さい頃には全く留学や外国語に興味を抱いていなかったものの、高校時に短期の海外研修（チェコ）に参加したことで、いろんな人に会ってみたいと思うようになり、留学ができる大学を選ぶようになったと述べている。高校時代にオーストラリアのサマープログラムに参加した別の学生は、（高校在学中に）大学での留学を希望するようになったが、オープンキャンパスを通じてある国立大学が最近交換留学を開始したことを知り、国公立大学は交換留学制度が確立されていないのではないかと考えるようになったという。そのため、関学や立命館のように交換留学制度が整っている私立大学にターゲットを絞り、結果として海外協定校数や短期から長期に至る留学プログラムが充実している関学を志願するようになったと述べていた。高校生の時にイギリスに留学した学生も、当初国公立大学への進学を希望していたが、1年間留学し、かつ4年で学部を卒業するのは難しいと考え、留学が卒業要件になっている本学の国際学部を受験したと述べている。

こうした学生は、関学入学直後から積極的に国際教育・協力センター（CIEC）の留学説明会に参加したり、言語教育研究センターが開講している集中英語科目を履修したり、あるいは副専攻プログラムに応募したりと、留学の情報収集と準備学習に励んでいる様子であった。特に神戸三田キャンパスに通学する学生は、キャンパス内での留学説明会や外国語関連の授業が少ないた

め、留学に関連した行事や授業への参加を心がけていた。

大学入学前に交換留学を志望する学生がいる一方で、入学後に交換留学を志す学生も少なくない。例えば、CIECの短期留学プログラムに参加したものの、現地学生との交流がなかったために物足りなさを感じて交換留学の申請を決めた回答者も数名存在した。例えば、短期留学後に韓国への交換留学を決意した学生は次のように動機を説明している。

(短期留学プログラムで行ったときは) 日本人が周りに多くて。私も初級だったので、すごく日本人に囲まれて。関学で行ったので、ルームメイトも関学生で。はじめてだったので、それはそれで楽しかったし、安心だったんですけど、クラスでも日本人ばかりで。その時に全然(韓国語を)習得できなかったなっていうのがあって…。今回も(交換留学先を)選ぶときに日本人が少ないところを選んだんです…。…(中略)…一回短期で行ったので、電車はどうやって乗るとか、あとは韓国の事情、生活のリズムとか人柄だとかそういうことを知れてよかったなと思います。あと、土地勘も…。その1か月行った学校と今回行った学校は同じ最寄りだったので、土地勘が身につけていたんで…。安心して行けました。

現地や現地語に慣れる上では短期留学プログラムは有用なのかもしれない。ただ、この学生のように現地学生との交流や現地の社会、文化について興味関心がある学生にとって短期留学は学びというより楽しいイベント程度のものであったという。イギリスの短期語学研修プログラムに参加し、後にカナダに留学した学生も短期留学よりも関学のインテンシブ英語の授業が語学力向上において有益だったと語っている。

このように大学入学前、入学後と違いはあるものの交換留学プログラム参加者はプログラム申請前に何らかの海外経験を有しており、その経験が交換留学を志すきっかけとなっている。逆に言えば、短期間でもそうした海外経験がないと学生にとって交換留学のハードルは高いと考えられる。

**交換留学を選ぶポイント** こうした学生はどのように交換留学先を選び、そこで何を学ぼうとしているのだろうか。興味深いことに、交換留学先の大学を選んだ理由として多かった回答は、「大学の所在地」あるいは「語学(主として英語)要件」であった。例えば、米国に留学した学生は留学先の選び方について次のように回答している。

TOEFL ITPの結果がまあまあ良くて。結構段階的に決まってるじゃないですか。それでちょっと自分のスコアで行ける高いところが留学先の大学で、これやったらライバルが少ないんじゃないかと思って。アメリカは人気っていうのはわかっていたので…。

(東海岸の大学に留学した学生)

私は単純にアメリカに行きたいというのが一番で…。あとは寒いのが苦手で。単純に住みやすそうなところですよ。半年とか1か月とかやったら選ばなかったんですけど、1年住むので。住みやすいところがいいかなと、それで西海岸…。本当はピッツァーに行きたかったんですけど…。



(西海岸に留学した学生)

中には教育関係に興味があって、北欧の教育を学ぶためにヨーロッパに留学したり、大学ランキングにおいてアジアで一位にランクインした大学を見たいとシンガポールに留学した学生もいたが、概して大学の所在地や語学要件に関する発言が多かった。留学先を選ぶ上で、関学生は受入機関の開講プログラムや開講科目よりも所在地や語学要件を重視しているようであった。但し、過去の短期留学で日本人どうしで固まった経験を有する学生、あるいは留学説明会で接点をもった先輩や大学紹介のために来学した現地の教員から刺激を受けた学生は、そうした実体験をもとにあえて日本人が少ない小規模大学を選んだり、数年来派遣実績がない大学に応募していた。

**交換留学中の学業生活について** 今回インタビューした回答者は皆、現地の大学で、英語による学術科目を履修していた。内容も「台湾の原住民」や「ダンス」、「ビジネスコミュニケーション」、「言語哲学」と多種多様であった。概して北米圏の大学では多くのリーディング・アサインメントが課され、講義とグループディスカッションを交えた要求度の高い授業が多いようであったが、アジアの大学では、パワーポイントを用いた講義であったり、学生に自主的に調べさせるグループワーク中心の授業などが展開されているようであった。但し、一部の学生を除き、関学よりも現地での予習や復習に時間を割いたとコメントした学生が多かった。その理由としては、現地の授業が予習を前提として進められており、第二言語で授業に臨まないといけないため自習の時間が必要だったこと、あるいはグループでの課題が多いことに起因するようである。例えば、韓国に留学した学生は次のように発言している。

関学にいる時と比べて、勉強はすごくしていました。ほぼ予習の時間なんですけど。リーディングを読むのも時間をかけて、予習復習をしていました。関学にいるときは1時間もしていません(笑)。現地でも当初は授業に行って、その時聴こうという感じだったんですけど、行ってもわからなかったんで(勉強するようになりました) …。

また、現地の授業で大変だったことは何かという問いの中で、現地の学生との討議の難しさを指摘する学生が多かった。例えば、台湾に留学した学生は、次のように発言している。

グループワークとか、めっちゃ小さいことなんですけど。はじめ、めっちゃ落ち込んで。色々。例えば、自分何で発言できへんのやろとか…。で、英語どうこうっていうより思考力がないかなって思って。それこそ関学の教室で何百人も入るところで(授業を)受けてたら、(授業を)受けてなくても一緒に感じじゃないですか…。現地の授業って、ちょっと違うことを言ったらめっちゃ批判されるじゃないですか。そういう教育を小さい頃からやってるからしゃあないことやなと思ったんですけど…。

もちろん学生や派遣先によっても異なるものの、英語だけでなく、現地学生の論理的思考力の

高さや学習スタイルの違いなどに圧倒され、当初不安を感じる関学生は少なくないようである。関学で英語開講科目を履修していた学生も、現地に行ってみると講師や現地学生の発話スピードについていくことができず、授業に慣れるまで大変だったとコメントしている。だが、そのためにオフィスアワーに頻繁に行ったり、授業後に教員や他の履修生に質問したり、寮に住んでいる現地学生に質問したり、ライティング・センター等を活用したりと能動的に学習に励んでいる様子であった。

**交換留学を振り返って** 交換留学で得たことについて問うたところ、大きく分けて4種類の意見が寄せられた。すなわち、「世界観の拡大」、「自律心の向上」、「社交性の向上」そして「自信の獲得」である。

留学で得られた成果で最も多かったのは「世界観の拡大」に関連するコメントである。留学により既存の価値観を相対化し、異なるものの見方を受け入れる余裕ができたと感じている学生が多かった。例えば、シンガポールに留学した学生は次のように回答している。

これは重要だと思うんですけど、物事を多角的かつ多層的にとらえる力、いわゆるクリティカル・シンキングですね。日本だとインプットしたものをそのまま美しくアウトプットするっていうのが点数的に重要なんですけど…、シンガポールの場合、いろんな奴がいるんで、必然的にインド人の視点、日本人の視点、中国人の視点とか。必然的に外人が多いんで違う意見が出るんです…。

この学生は、英語で他の外国人留学生や現地学生と討議する中で物事の裏を読む癖がついたと感じているようであった。また、サンフランシスコに留学した学生は自然とLGBTを受け入れられるようになった証左として次のようなエピソードを紹介している。

サンフランシスコはLGBT発祥の町で、周りにもたくさんそういう子たちがいたんですね。最初はびっくりしてたんですけど、あまりに普通で…。私もゲイの友達とか仲良く遊んでたんですけど、あるときアメリカに留学していた(日本人の)友達が遊びに来て、(友達の)男子二人が仲良くしていたのを見て、「うあ」と言ったんですよ。私はそもそも何に対して驚いているのか分からなくて、そういうのが当たり前だったんで…。

こうした学生の発言に含意されているのは、それまでの価値観が相対化されたという認識、そして自らもそうした新しい価値観を受入れ、自らの世界観を広げているという点である。現地学生と交流する機会が多い交換留学ならではの成果だと考えられる。

留学生活の成果として触れられた第二の点は「自立心の向上」である。今回の回答者の多くは関西圏出身者であったため、交換留学が親元を離れ、自立した生活を送る貴重な機会となっていたようであった。中には、日本に帰りたいとホームシックになったという学生もいたが、親の有難さや自分の環境がめぐまれていることに感謝するようになったという学生もいた。例えばカナダに留学した学生は次のようにコメントしている。

一人暮らしをしたことがなかったんで、「すごい守られてたんやな」と思うこともあるし、しっかりせななという意識はつきました。実は、一回風邪をひいて。そういう時に薬は持っていたんですけど、嘔吐系の風邪だったので…。「あれもこれも自分でせなあかんし、でもしんどいし」みたいになって。やっぱり最初からちゃんと体調管理とかもせなあかんし、あと忘れものとかも全部自分の責任なんで…。責任をもっと意識して、強くしていかなければいけないなと感じました。

単に自立する必要性を感じた学生がいる一方で、留学の機会を最大限に活かそうと、自ら現地の日系企業やシュタイナー教育の現場を訪問したり、履修した授業の教員の紹介を得て、現地の観光案内所で観光案内や割引チケットの紹介などの観光ボランティアに励んだ学生もいた。こうした学生は、周りを気にする必要のない海外だからこそ、やりたいことは自ら働きかけていこうという姿勢で留学生活を送っていたようである。

留学生活の成果として言及された第三の点は「社交性の向上」である。授業だけでなく、クラブや学内外のサークル、寮生活などを通じて現地学生や他の留学生、現地の日系駐在員と交流し、人脈を構築している学生が少なくなかった。例えば、韓国に留学した学生は、最初人見知りで他の学生と話せなかったというが、留学生活を送る中で社交的になったという。

人に話しかけやすくなったし、話しかけられやすくなりました。慣れましたね。…最初は人見知りして、はじめて会う人には心開けなかったんですけど、だんだん新しい人しか増えてこないで。最初からががが話しかけられるようになりました。

この学生は、現地で知らないおじさんやおばさんから話しかけられるようになり、その際外国人ではなく田舎出身の韓国人と間違えられたと嬉しそうに語っていた。現地に溶け込めたという経験から、より社交的になったと感じているようであった。

留学生活の成果として学生が認識していた第四の点は「自信の獲得」である。留学生活が充実していた学生も、留学先で挫折に直面した学生も、留学先での状況を肯定的に受け止め、自信を獲得したようであった。例えば、ドイツに留学した学生は、履修を希望していたドイツ語の授業が取れなかったものの、他の学生を巻き込んでスタディ・グループを形成したり、自らも積極的にドイツ人に話しかけることで、言語だけでなく未知の世界に挑戦する力と自信を獲得したと語っている。また、アメリカに留学した別の学生は現地で人生初めての挫折に遭遇したものの、自分をそのまま受け入れてくれる留学生と出会ったことで、自分らしく過ごそうと思うようになったとして、次のように語っている。

(留学先で)挫折したんですけど、自分が倒れてしまったときにどうやって(自分を)起こすかという方法を学びました。…うまくいかないときってどうしてもあるじゃないですか。自分に原因がある場合もあるし、外的環境とか、その時のタイミングっていうのもあると思うんですね。…で、そういうときもあるって学んだんです。自分にめちゃくちゃプレッシャーをかけるのをやめようって。…自分ができる範囲でがんばったら大丈夫って、自信をもって頑張り続

けることが大事やなって学びました。

海外生活においては順風な時も、逆風な時もある。周りに頼れる日本人がいない場合は心細く感じることもあるだろう。しかし、今回インタビューに応じた回答者はそうした中において視野を広げ、自立的な生活を心掛け、また社交性をたかめていくことで、自信を獲得していった様子であった。

**関学の交換留学支援体制について** 最後に、関学の交換留学の支援体制についてどう思うかと質問したところ、回答者の多くは他の大学に比べて充実しているほうだとの認識を示した。ただ、短期や中期留学に比べて交換留学に関する情報量が少ないこと、また交換留学申請においては、国際学部の学生が有利になっていることに不満を述べる者もいた。例えば、商学部から留学したある学生は、非国際学部生にとって授業料相殺型の交換留学の障壁が非常に高いとして次のように説明している。

グローバル大学って言っている割には交換留学や長期留学に対しての枠とかがめっちゃ少ないなって思います。やっぱり国際学部の子しか実際(留学)できないっていう難しさもあります。…交換留学生に選ばれるのには2つの条件があって、一つは英語力なんですね。で、二つ目が学校の成績、GPA なんです。…英語力が高い子たちが行くのはわかるんですけど、中には私よりも英語力が低い子たちもいたんですね。でもその子たちは国際学部のGPAが取りやすいから、(留学に)行けるっていう感じだったんです。だけど商学部とか他の学部はGPAが取にくくて、国際学部比べて…。

また、交換留学先での学習内容や単位が関学内で認められないことに対して納得いかないと感じる学生も複数名いた。例えば、総合政策学部のある学生は、カナダの大学において1年にわたってリーディング・アサインメントや宿題が多い授業を7科目履修したが、授業時間により認定単位数が決定されるため、結果として関学での1学期分にも満たない18単位しか認められなかったと述べている。留学前は職員に「(留学に行っても)4年で卒業できます」と言われていたが、帰国後に思ったほど単位が認められなかったためモチベーションが下がったと語っている。この学生は、関学の「楽タン科目」(楽に単位が取れる授業)が、なぜカナダの授業よりも単位として価値があるのか納得いかない様子であった。また、前述の商学部の学生も単位認定についての事前情報がなかったため、なかなか単位認定がされなかったとし、次のように述べている。

思ったより単位が取れないんです。普通に関学で勉強しておけば今この段階でも単位を取り終えていたんですけど、留学に行っていたこともあって。単位が留学生だから取れないっていうこともあるし、向こうの授業時間数とこっちの授業時間数の違いもあって全然単位認定してもらえないんです。だから4年生卒業するまで私はマックスで授業を取らないと卒業できないっていう、すごい大きな問題があります。そこは何としてでも改善してほしいなと思ってます。…留学中はなるべく単位を稼ぎたかったんで、関学で単位認定できる授業をしぼってから授業

を選んでたんですね。もしそういう縛りがなかったらもっとアメリカならではの授業とかいっぱい取りたかったんですよ。ダンスの授業とか、異文化理解の授業とか、ジェンダーの授業とか。

せっかく留学したにもかかわらず、取りたい授業が取れないというのは実に遺憾な話である。ただ、国際学部の学生に単位認定について問うたところ、ほとんどの学生が履修した科目の単位を認定することができたと述べているため、学部による違いがあるように思われる。(一つには国際学部が卒業までに留学を課していることがあるのかもしれない。) 総じて、現状の交換留学プログラムは、申請時においても、また単位認定においても非国際学部の学生は国際学部の学生と比べ不利な状況にあると考えられる。

#### 4. まとめ

インタビューに応じた交換留学経験者の大半がそうであったように、交換留学に参加する学生はプログラム応募時点までに何らかの海外経験を有している場合が少なくない。その内容自体は、長期の海外在住経験であったり、短期の修学旅行や語学研修プログラムであったりと個人差があるが、いずれもそうした海外経験が、交換留学を志望する大きなきっかけとなっているといえる。また、交換留学先の選定にあたってはそれ以前の渡航経験が一定の影響力を及ぼしていると推定される。

留学目的に関して言えば、アンケート調査結果で示されたように、外国語習得あるいは現地の生活体験、文化理解等を目的に交換留学プログラムに参加する学生が多かった。逆に専攻分野の理解やキャリア開発を目的に交換留学に臨んでいる関学生は比較的少ない。このため、受入機関のプログラムや科目というより、大学の所在地や外国語要件を基に留学先を選んでいる学生が多いように見受けられた。その原因の一つは、多くの関学の学生が1年次に交換留学申請を行い2年次から3年次にかけて交換留学プログラムに参加しているため、自らの興味関心が定まらないまま留学先を選んでいることも一因だと考えられる。学問的に有意義な交換留学を推奨する上では、もう少し留学に向けてのブリッジプログラムを充実させ、3年次から留学する学生を増やしていくことが望ましいかもしれない。

留学の成果としては、学生自身の世界観の拡大や自立性の向上、社交性の向上、そして自信の獲得に関するコメントが多かった。他の日本人と同じプログラムに参加する短期・中期留学と比べ否応でも自主的にならざるを得ない交換留学は、学生に挫折の機会をもたらす場合もあるが、同時に困難を乗り越える機会を提供している。そうした中で学生は、自らの在り方を見つめ直し、トライアル・アンド・エラーで新しいことに積極的に挑戦しているように思われる。先行きが見えない日本社会において、こうした交換留学経験者は大変頼もしく見えた。

一方で、交換留学生を送り出す大学として関学が取り組むべき課題も明らかとなった。特に学部間における交換留学申請あるいは単位認定における格差という点は、今後スーパーグローバル大学としてさらに学生を派遣していかなければならないことを考えると、早急に検討すべき課題であるだろう。全学レベルで留学準備にかかるカリキュラムや手続きの標準化を進めることが難しいのであれば、せめて学部ごとに交換留学希望者の支援を手厚くすべきではないだろうか。理

想としては留学アドバイザーなるものを設け、海外の協定校に関する情報共有、学生の選抜やオリエンテーション、帰国後の単位認定などのフォローアップに個別に応じていけると良い。

いうまでもなく協定校に派遣する交換留学生は、関学にとっても重要な「親善大使」である。こうした交換留学生を学内でしっかりと認知し、育成していくことがスーパーグローバル大学としての務めだろう。例えば、帰国報告会だけでなく、チャペル・アワーや教職員集会などの機会をとらえて、表面的な美談にとどまらない、交換留学生のリアルな出会いや悩み、そして喜びを他の学生や本学教職員と共有できる機会を増やしていければと思う。そうした取り組みを地道に行っていくことで、より多くの関学生を海外へと誘い、より深い次元で本学のグローバル化を押し進めることにつながるのではないだろうか。

## 謝辞

なお本稿は2017年度高等教育推進センター共同研究助成「留学生の留学目的と達成度に関する研究」(研究代表者 水戸孝道・法学部教授)による研究成果の一部である。

## 参考文献

- Bok, D., 2006. *Our Underachieving Colleges*. Princeton: Princeton University Press.
- 河合淳子, 2009. 海外留学の動機と制度的制約—日本人学生対象アンケート・インタビューの考察. 京都大学国際交流センターアンケート調査班, 京都大学における国際交流の現状と発展に向けての問題提起: 第3回アンケート・インタビュー調査報告書. 京都: 京都大学国際交流センター, pp. 105-120.
- 河合淳子, 2011. 大学における学部学生の留学促進. ウェブマガジン『留学交流』, 5[2], pp. 1-12.
- 岩城奈巳, 2012. 留学推進の取組が交換留学に与える影響についての実態調査. 名古屋大学留学生センター紀要, 第10巻, pp. 23-29.
- 源島福己, 2009. 大学生の海外留学と社会人基礎力の発達. 留学交流, 21[12], pp. 2-5.
- 小柳志津, 2002. 留学大衆化のなかの在豪日本人留学生: 留学動機と成果を中心に. 留学生教育, 第7号, pp. 27-38.
- 杉野・武・正楽, 2017. 大学生の視点から見る海外留学・国際交流プログラムの課題—スキル向上からの資質昂揚に向けて—. 香川大学インターナショナルオフィスジャーナル, 第8号, pp. 1-14.
- 船津秀樹 堀田, 泰., 2004. 海外留学に関する意思決定問題. 商学討究, 55[1], pp. 89-108.
- 池田, 庸., 2011. 海外留学の意義とメリットを考える. ウェブマガジン『留学交流』, 7[4], pp. 1-10.
- 独立行政法人 日本学生支援機構, 2017. 平成27年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果. [http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_s/2016/index.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2016/index.html) [アクセス日: 2017年10月11日].
- 野水, 勉. 新田, 功., 2014. 海外留学することの意義—平成23・24年度留学生交流支援制度(短期派遣・ショートビジット)追加アンケート調査分析の結果から—. ウェブマガジン『留学交流』, 7[40], pp. 20-39.